中京大学　心理学研究科・心理学部紀要
第 4 巻 第 2 号（2005）85 ― 92 頁

コミュニケーション理解のツールとしての ロールシャッハ・テスト

中京大学心理学部　八尋華那雄[注1]

The Rorschach Test as a tool of understanding mutual communication

YAHIRO, Kanao（School of Psychology, Chukyo University, Yagoto-honmachi, Showa-ku, Nagoya, 466-8666）

中京大学心理学研究科設立を記念する紀要の本号に，自分の研究の振り返りと展望を記すことが求められている。筆者の携わってきた領域の一つであるロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略す）のことを取り上げようと思う。

投影法は，その人の知覚・認知により様々に解釈でき，固有の判断や表現を促す課題を通して得られた反応を手掛かりに，その人の人格上の特徴を把握する方法の総称である。被検者によって表現され，得られる反応は絵であったり，文章や物語であったりする。投影法の各技法に求められている問題は，これらの得られた反応をどのように整理し解釈するかにあった。inkblot の形態判断を求めるロ・テストは，もともとは投影法として作成されたわけではなかったが，その後起こった投影法運動の流れの中で投影法として規定された技法である（Exner 1986 p20）。ロ・テストの臨床の場における適用と共に，ロ・テスト反応の整理・解釈のためにスコアリング・システムが種々開発されてきたが，とかくその信頼性と妥当性に疑問が呈されてきた（Myers 1986 p415-417）。それ故に，包括システムのような数量的なアプローチが確立されてきたという経緯もある。

現在，わが国のロ・テストのスコアリング・システムを巡る動向は，包括システム（Exner 法）の nomothetic なアプローチと片口法（修正 Klopfer 法）の idiographic なアプローチに二分されるように思われる。同じ図版を用い，やや異なる整理・解釈過程を持つ包括システムと片口法の異同については，中京大学心理学部・心理学研究科紀要（八尋・明翫，2005）に 2 編報告し，なお継続して両法の特徴を明らかにする計画である。

(1)　ロ・テストから見られるもの

ロ・テストのスコアリングは被検者が刺激をどのように捉え，何を手掛かりに課題遂行を行っているかを明らかにする上で不可欠な手続きであるが，筆者は inkblot をどのように捉え，何を手掛かりとして，何を見たかだけではなく，「その判断を検査者にどう伝えたか」の方がよりその人を理解する大事な情報であると考えている。

私たちは，日常たくさんの判断をする。そしてその判断の多くを他者に伝えるという作業を行っている。ロ・テストカードの inkblot から想起したものを，ある者は理路整然と blot の部位を見たものに擬えて行く。自分が見たものが当然検査者にも見えると期待する者もいる。その説明のあり方は様々である。どう伝えるかは，被検者の日常のコミュニケーションのあり方を反映していると言っても良いだろう。説明の仕方や構成が大事だと考えるので，筆者はロ・テストの施行に際して，通常Ⅱカード目までは「どこに」「なぜ」とルーティンの質疑を繰り返すが，Ⅲカード以降は「○○とおっしゃいましたが，今までと同じように説明して下さい」と被検者に説明の組み立ても任せるようにしている。任せてしまう方が，被検者の日常のコミュニケーションのあり方がよりはっきりと見えてくると考えるからである。

(2)　同席ロールシャッハ（paired Rorschach）

以前，K 大学医学部精神科に勤務していた時に，入院の患者で統合失調症と診断された青年を担当したことがある。被害・追跡妄想を有していたが，薬

注 1　kyahiro@lets.chukyo-u.ac.jp

物療法で比較的速やかに症状は消失していた。彼は，退院したと云い，もう二度と再発はしないと断言するのだが，治療スタッフはその安易な確信に不安を抱いていた。両親を交えた彼との家族療法の場で，母親も彼と同様の判断であると主張して譲らなかった。結局，外来で治療を継続することとなったが，この母子の関係を査定するためにロ・テストを施行することを二人に提案し，行うこととなった。この時得られた母子の非常によく似た認知や十分な説明もなくまた筆者から見て疑問な点があっても批判なしに相手の反応を了解してしまう経過を見て，筆者はこのロ・テストの通常とは違った用い方の効用，即ち家族内での二者あるいは成員間の認知の類似やコミュニケーションの在り方の把握に関心を持った。以来，その職場では，家族ホメオスターシス的観点から夫婦や親子の同席ロ・テストを行ってきた。

親子・夫婦あるいは家族成員は長い期間に亘って相互に独自の交流様式を作り上げていると推測される。その交流は他者にも通用するような内容や様式であることもあれば，あるいはその家族や二人の間にしか通用しない形で形成されることもあり得る。通常，家族を対象として行われるコンセンサス（合意）・ロールシャッハ法では，全家族成員の合意する反応を各カードに一つずつ選択・決定することを求め，その合意に至る過程から家族成員間の力動を知ろうとする。しかし，筆者が試みたのは，一組のカードを用い，Cl と配偶者あるいは親（母親のことが多い）を同席させて，個人法ロ・テストと同じ要領で施行する方法である。自由反応段階では，順不同に通常のように反応を求める。自由反応段階でも二人の間に疑問を呈したり同意したりというやり取りが見られる。それらのやり取りも各々の反応と共に記録する。一度に二人施行するのだから検査者の記録の負担は当然増すが，この方法の眼目は次の質問段階の Inquiry（質疑）にある。Inquiry では，二人がそれぞれ想起したものについて，「どこに」「なぜ」「特にそう思ったのは」など判断の根拠を全ての反応一つ一つに尋ねて行く。判断に至るプロセスの情報をペアの相手と検査者に向かって説明してもらうのである。更に，そのような説明を受けて相手はそれをどのように評価するかを尋ねる手続きを加え，相互の評価を見ようと意図した。この追加の手続きは具体的には，その説明を聞いている相手に対し，検査者が「説明を聞いて解りましたか？そう見えますか？」と尋ねる。答えは，「ええ，解ります」「一部はそう思えますが，全体では・・」「解りません」「見えません」など，様々である。中には，平凡反応や検査者には了解できる説明に対して，「解りません」という返事が返ってくることもある。また，形態質も悪く，了解困難な反応に対してあっさりと「解ります。そう見えます」と答えることもある。この相手の反応に対する評価の記号化は，「解る」「同じように見える」「大体そう見える」など同意を示した場合は＋，「部分的にはそうみえるが」「似ているけど，ここがこうなら」など部分的同意には±，「解らない」「見えない」「私はこう見える」などは不同意として－とスコアする。

(3)　質問段階で求められている作業

ロールシャッハ反応に正解はないが，平凡反応や平凡水準の頻度の高い反応は各カードに存在する。また，blot の特異な部分を切り取って，そこに独創的なものを想起したとしても，細かな明細化でその内容が検査者に明確に理解できることも少なくない。勿論 blot はある物を写実的に描写してはいないが，どこか形態的に類似した特徴を有している。だからこそ，「ここが頭，ここが手」というように説明が可能なのである。運動や奥行き・三次元の知覚（形態立体反応）にしても形態が関与している場合がほとんどであろう。形態以外にも色や濃淡と言った blot の特徴も，より客観的に blot と反応を結び付ける手掛かりとなる。このような blot の持つ形態・色彩・濃淡などの特徴を指摘して行けば，その指摘が適切な範囲のものであれば，自分の認知した内容（反応）は他者にも理解してもらえるはずである。その作業を求めているのが質問段階での Inquiry である。

(4)　夫婦同席・母子同席

前述の母子同席ロールシャッハを施行したことを機に，夫婦や母子を中心とした同席ロ・テストを行うようになった。70 年代に夫婦 20 組，母子 21 組，父母やきょうだいなど 3 組を施行した。その内の幾つかの事例を，臨床精神医学第 4 巻 12 号（1975 年）第 6 巻第 4 号（1977 年），ロールシャッハ研究 XXI（1979 年）に報告した。保存していたプロトコルが，ゼミ室の移転の時に誤って溶解されてしまい，手元には報告書を書いた時のスコアリング・データしか

残っていないのは残念でならない。だが，それら44例の同席ロ・テストの中から特徴的なコミュニケーションを示す事例を示して，この方法の意義を考えて見たい。

(5) 事　例

事例1：T・T（うつ病38歳）と妻K・T 38歳（以下被検者をCl，妻をSpと略す）Clは大卒の会社役員。Spは専業主婦。施行はX年11月27日。表1に二人の反応語・スコアリング・相手の反応の評価を，表2にKlopferの形態水準別の同意・不同意を，表3－1と3－2に個々のスコアリングの集計を示す。

Clが6枚のカードで先に反応を示した。ClとSpはほぼ同じ内容の反応を6枚のカード（Ⅰ，Ⅱ，Ⅲ，Ⅳ，Ⅴ，Ⅷ）で各々一つずつ見ている。その内5個は平凡反応（P）かP水準の反応であった。Clは筆者の求めに応じて部分の形態を1・2指摘するに止まり，更なる要請に促されて他の決定因を答える程度で，自ら積極的に明細化をすることはSpよりも少なかった。Clの15個の反応の中で8つ（Ⅰ①

表1　T夫婦のロ・テスト反応とその相互評価

Card No.	T.T Resp No.	T.T 反応語	T.T スコアリング	T.T 評価	K.T Resp No.	K.T 反応語	K.T スコアリング	K.T 評価
Ⅰ					①∧	5”　動物	WS F ± Ad 1.0	+
	①∧	お面	WS F ± Mask 1.0	+	②∧	人が3人踊っている	W M ± H, Cg 2.5	+
	②∧	トリ	D F ± A 1.0	+				
	③∧	動物の顔	WS F ± Ad 1.0	+				
Ⅱ					③∧	4”　赤帽の人が二人	W M±FC H, Cg P2.0	+
	④∧	人が二人	W M ± H P 1.0	+	④∧	ロケットが火をふいて	SD Fm±CF Arch 1.5	+
Ⅲ	⑤∧	15”フェニックス	D F ∓（A） 0.5	+				
					⑤∧	トンボ	dr F ± Ad 1.0	±
					⑥∧	鳥	D F ∓ A 0.5	+
	⑥∧	人の顔	DW F － Hd －1.5	－				
Ⅳ	⑦∧	毛皮	W Fc±Aobj P 1.0	+				
					⑦∧	同じ（毛皮）	W Fc ± Aobj P 1.0	+
					⑧∧	大木	W F ∓ P l 0.5	－
	⑧∧	怪獣	W F ±（A） 1.0	+				
Ⅴ					⑨∧	2”　チョウ	W FC' ± A P 1.5	+
	⑨∧	同じ（チョウ）	W FC' ± A P 1.5	+	⑩∧	ウサギ	D FM ± Ad 1.5	±
Ⅵ	⑩∧	5”　トラの毛皮	W Fc ± Aobj P 1.0	+				
					⑪∧	ネコ	W Fc ± A 1.0	－
					⑫∧	高いところから下を	dr kF ∓ Geo 0.5	－
Ⅶ	⑪∧	10”　魔法使い	D F ±（H），Cg 1.5	+				
					⑬∧	女の人	W M ± H P 2.0	－
Ⅷ	⑫∧	13”　動物	D F ± A →P 1.0	+				
					⑭∧	動物	D F ± A →P 1.0	+
	⑬∧	火山	D mF∓csym Expl 0.5	+				
					⑮∧	山	D F ∓ Na 0.5	±
					⑯∧	パンジー	W F ± Pl.f 1.0	+
Ⅸ					⑰∧	14”　噴出	W mF∓CF Fire 0.5	+
	⑭∧	花	W CF ∓ Pl.f 0.5	+				
					⑱∧	人が動物を	D M ± H, A 2.0	－
Ⅹ	⑮∧	5”　昆虫	W F ∓ A 0.5	+				
					⑲∧	人	W M±FC H, Cg 2.0	－
					⑳∧	プランクトン	D F ∓ A 0.5	+

表中の網掛けは同一反応

表2　事例1　ClとSpの相互評価

Clの反応をSpは								Spの反応をClは						
形態水準	1.5	1.0	0.5	-0.5	-1.0	-1.5		形態水準	2.5	2.0	1.5	1.0	0.5	
同　意　＋	2	7	4				14（99.3%）	同　意　＋	1	1	2	4	3	11（55%）
部分同意　±								部分同意　±			1	1	1	3（15%）
不同意　－						1	1（6.7%）	不同意　－		3		1	2	6（30%）

表 3-1　T.T の集計

Summary Scoring Table					
Location		Determinants		Contens	
W	9	F	9	A	4
DW	1	M	1	A d	1
D	5	F M	0	(A)	2
S	(2)	mF	1	H	1
計 15	(2)	Fc	2	H d	1
		csym	(1)	(H)	1
		FC'	1	Aobj	2
		FC	0	Mask	1
		CF	1	Cg	(1)
		計	15 (1)	Pl. f	1
				Expl	1
				計	15 (1)
P＝4 →P=1	Av.F-L=0.77				
	Av. Chrom. F-L=0.36				

表 3-2　K.T の集計

Summary Scoring Table					
Location		Determinants		Contens	
W	10	F	8	A	5 (1)
W'	1	M	5	Ad	3
D	6 (1)	FM	1	H	5
dr	2	Fm	1	Fire	1
S	1 (1)	mF	1	Pl	1
計 20	(2)	k F	1	Pl.f	1
		Fc	2	Aobj	1
		FC'	1	Arch	1
		FC	(2)	Cg	(3)
		CF	(2)	Geo	1
		計	20 (4)	Na	1
				計	20 (4)
P＝4 →P=1	Av. F-L=1.2				
	Av. Chrom. F-L=1.14				

③，Ⅱ④，Ⅳ⑦⑧，Ⅴ⑨，Ⅵ⑩，Ⅷ⑫）はＰかＰ水準の内容であった。それらの反応は Sp も全て了解（同意）できるとしている。残りの 7 つの反応の内，Ⅰ②鳥，Ⅶ⑪魔法使い，Ⅷ⑬火山，Ⅸ⑭花，Ⅹ⑮昆虫の 5 つも Sp は同意している。これらは筆者も了解できる内容であり，説明もそれなりに頷けるものであった。Ⅲ⑤フェニックスは D2 の部分だが，Sp もそこに鳥を見ている。二人ともくちばしが鳥のようだと説明し，羽と足も指摘した。Cl はなぜそれがフェニックスと思ったのか詳しい明細化はできなかったが，Sp は疑問も抱かずあっさり同意してしまっている。このように Cl の 15 個の反応の内 14 個に Sp は同意を示したが，唯一見えないと拒否した反応があった。それはⅢ⑥で，Cl はｄ１を目として全体で人の顔であるという。目以外の部位の説明はなく，慎重に質疑したが DW（作話性全体結合反応）とせざるを得ない反応であった。この内容には Sp は同意していない。DW は健常成人に見られることはほとんどない病的な反応と言ってよい。Cl は十分な理由を示せずに，人を魔法使い，鳥をフェニックスと over elaborate することがあるが，大半の反応は平凡でその説明も行き届いているとはいえないものであった。生き生きとした活力に欠け，外界からの刺激に対する反応性も低い状態にあると推測された。

一方，20 個の反応を示した Sp は，半分のカードに人を見，人間運動反応の M が出現している。このことは W の量・質（W Av.F-L=1.45）からも知的能力の高さと共に想像力の豊かさ，他者との共感性を示すものである。外界に対する反応性の指標としての色彩反応は add.ながら 4 個あり，この点についても問題はなさそうである。反応内容の巾も十分あって，生活空間も適度に広いことを物語っている。以上のように健康な面の多いプロトコルではあるが，例えば FM の少なさ，Fm・ｋF・Fc といった不安の指標が高いといった特徴が見られる。この場合活気に欠けるというよりも抑制の強い人柄を示すものと考えられ，不安の存在（多分，夫の病気とも関係があろうが）に努力して対処している状態を示していると思われた。これら Sp の反応に対して Cl が下した評価は，同意 11，部分的同意 3，不同意 6 であった。不同意の半数は人間反応で，blot とのマッチ度も良い反応であった。人を見ることの多い Sp が唯一Ｐ反応の人を見なかったのがⅢカードであった。Sp の能力をすればここで人を認知できないとは思えない。不思議な現象であった。

Cl のプロトコルは，38 歳の大卒，会社役員という生活史から想像できないほど平凡で膨らみのないものであった。Sp の反応と対比すると，Cl の精神機能がまだ低下した状態であることが推測された。同時に施行された SCT の文章も短く，文字も乱れていて，簡単な漢字が平仮名で書かれていたりする。文章から受ける印象は「弱々しい」という感じであった。Cl は自身を，小心で生真面目，些細なことで悩み，優柔不断で過敏だと述べているが，そのような特徴は，ロ・テスト上では color - shock で現実検討力が弱まる以外に認められなかった。

Cl の健康な時のプロトコルはもっと豊かなもの

に違いない。Cl は時に主観的だが想像力のある認知の片鱗を見せている（フェニックスや魔法使い）が同時に健康な時もひどく歪んだ判断をする（DW，Ⅲの人の顔）可能性を伺わせる。Sp の現実吟味は良く，日頃からも夫の判断に合わせていることが推測されるが，非現実的な判断には同意しないという健康さを有していると思われる。それとは対照的に，Cl は Sp の質の高い判断を受け入れない傾向があるが，それが日頃からそうなのかは判然としない。

事例 2：J・K（うつ病 45 歳）と妻 K・K 41 歳。Cl は大卒の公務員。Sp も会社員。施行は X 年 12 月 22 日。

表 4 に二人の反応語・スコアリング・相手の反応の評価を，表 5 に Klopfer の形態水準別の同意・不同意を，表 6－1 と 6－2 に個々のスコアリングの集計を示す。

Cl は検査に協力的で，8 枚のカードで先に反応し，反応量も多かったが，Sp の方は口数少なく，促されないとなかなか発言しなかった。また，Sp は Cl の示す反応や説明を聞いている時は「そうね」と相槌を打つ程度で，反応量は Cl の 1/2 しかなかった。反応の質は両者とも悪く，特に Cl には形態水準マイナスが 7 個も存在する。

Cl の総反応数は 29。反応数は健常成人の平均範囲内で，生産性・反応性は十分に認められるが，反

表 4　K 夫婦のロ・テスト反応とその相互評価

Card No.	J.K				K.K			
	Resp No.	反応語	スコアリング	評価	Resp No.	反応語	スコアリング	評価
Ⅰ	①∧	2”　オオカミの顔	WS FM±A d　1.5	+				
	②∧	ウサギ	W　F ∓（Ad）　0.5	+				
					①∧	コウモリ	W　F ± A　P 1.0	+
					②∧	オニのカオ	WS F ±（Hd）　1.0	+
	③∧	どくろ島	WS cF － Na　O -1.0	－				
Ⅱ	④∧	8”　ネコのカオ	WS F ± Ad　1.0	+				
					③∧	ネズミ	d　F ∓ Ad　0.5	－
					④∧	二人で踊って	W　M±FC H, CgP 2.0	+
	⑤∧	灯台	WS F ∓ Arch, Na　0.5	－				
	⑥∧	顔	DW Fc － Ad　－1.5	+				
	⑦∧	何か踊って	D　FM ∓ A　0.5	+				
	⑧∧	血	D　CF ∓ mF Bl　0.5	+				
Ⅲ					⑤∧	5”　子供	W　M ± H　P 1.0	±
	⑨∧	人か鳥	D　M±(H), Obj(P)1.0	±				
	⑩∨	甲虫	W　F±（Ad）　1.0	+				
Ⅳ	⑪∧	18”　動物を解剖	W　Fc±AAt, Aobj　1.0	±				
	⑫∨	コウモリ	W　F ∓ A　0.5	+				
	⑬∨	レントゲン	dr　kF － Xray　－1.0	+				
					⑥∧	葉っぱ	D　FK ∓ Pl　0.5	+
Ⅴ	⑭∧	15”　チョウ	W　F ± A　P 1.0	+				
	⑮∧	カタツムリ	d　F ± Ad　1.0	+				
	⑯<	コウモリ	W　FM ± A　1.5	+				
	⑰∧	人	W←D F ∓ H, Art　0.5	－				
					⑦∧	筆で書いた文字	d　F ∓ Letter　0.5	±
Ⅵ	⑱∧	25”　マンドリン	W　F±csym Music　1.0	+				
	⑲∧	洞窟	dr　FK － Na　－1.0	－				
					⑧∧	動物	D　F ± Ad　1.0	－
					⑨∧	果物	D　F ∓ Art, Pl　0.5	+
Ⅶ	⑳∧	20”　動物	D　Fc ± Ad　1,0	+				
					⑩∧	子供のカオ	D　F ± Hd　→P 1.0	±
					⑪∧	中国の椅子	W　F ∓ Obj　0.5	+
	㉑∨	神	WS F －（H), Cg　－1.0	+				
Ⅷ					⑫∧	5”　顔と口	W　F/C － Hd　－1.0	±
	㉒∧	カメレオン	D　FM ± A　P 1.0	+				
	㉓∧	花	W　CF ∓ Pl. f　P 0.5	+				
					⑬∧	つつじ	D　FC ± Pl. f　P 1.5	－
	㉔∧	サーカスが火事	D　F∓CF,m Arch, Fire O　0.5	+				
Ⅸ	㉕∧	28”　動物のカオ	W　F∓ Csym Ad, Obj 0.5	+				
					∨⑭	花	W　CF ∓ Pl. f　0.5	+
Ⅹ	㉖∧	13”　カミキリ	D　F ± A　1.0	+				
	㉗∧	チャンチャンコ	D　FC ± Fc Cg　1.5	+				
	㉘∧	コオロギ	D　M ∓ A, Fire　－0.5	－				
	㉙∧	骨盤	D　Fk－Atb, Xray　－1.0	+				
					⑮∧	水族館	W　F∓CF Na, A, Pl　0.5	+

表 5　事例 2　Cl と Sp の相互評価

Cl の反応を Sp は								Sp の反応を Cl は								
形態水準	1.5	1.0	0.5	-0.5	-1.0	-1.5		形態水準	2.0	1.5	1.0	0.5	0.0	-0.5	-1.0	
同　意　＋	3	8	7		3	1	22（75.9%）	同　意　＋	1		2	5				8（53.3%）
部分同意±		2					2（ 6.9%）	部分同意±			2	1			1	4（26.7%）
不同意　－			2	1	2		5（17.2%）	不同意　－		1	1	1				3（20　%）

表 6-1　J.K の集計

Summary　Scoring　Table		
Location	Determinants	Contens
W　12	F　13	A　7
W̶　3	M　2	Ad　6
DW　1	FM　4	(Ad)　2
D　10(1)	mF＋m (2)	H　1
d　1	FK　1	(H)　2
dr　2	F k　1	Atb　1
S　(5)	kF　1	A. At　1
計　29(6)	F c　3 (1)	Xray　1 (1)
	cF　1	Na　2 (1)
	csym　(1)	Arch　2
	FC　1	Bl　1
	CF　2 (1)	Pl. f　1
	Csym　(1)	Music　1
	計　29 (7)	Cg　1 (1)
		Aobj　(1)
		Fire　(2)
		Art　(1)
		Obj　(2)
		計　29 (9)
P＝3.5 O=2	Av. F-L=0.4	
	Av. Chrom. F-L=0.43	

表 6-2　K.K の集計

Summary　Scoring　Table		
Location	Determinants	Contens
W　7	F　9	A　1 (1)
W̶　1	M　2	Ad　2
D　5	FM　0	H　2
d　2	Fm　0	Hd　2
S　(1)	FK　1	(Hd)　1
計　15(1)	FC　1 (1)	Pl.f　2
	F/C　1	Pl　1
	CF　1	Art　1
	計　15 (1)	Obj　1
		Letter　1
		Na　1
		Cg　(1)
		計　15(4)
P＝4.5	Av. F-L=0.73	
	Av. Chrom. F-L=0.71	

応質には問題があり，現実吟味力が低下している。カードの些細な特徴にも注意を向ける過敏さが見られる。それに加え，blot の濃淡・色彩などに知的だが主観的な意味づけを行う。換言すれば，外界への感情移入が強いと言えよう。このことが客観性を乏しくしている一因でもある。vital な energy は認められるが，内的統制は悪く，衝動的な傾向を示唆している。敏感で不安・葛藤を抱き易い性格で，それらのことを知的に処理しようとするが，十分に効果をあげていないことがロ・テスト上推測される。

Sp の総反応数は 15。反応拒否はないが反応性は低い。多くが形態のみを捉えたもので，抑圧的な傾向が伺われる。それゆえ，Cl とは異なり感情移入することは少なく，現実検討力を損なうことはない。特徴は，F%=60, M: FM=2＞0, FC: CF+C=2.5＞1.5 に見られるような過剰な統制にある。

このペアで最も特徴的であったのは，同一の反応（同一領域，同一決定因，同一内容）がないことである。他のペアでは，これだけの反応数があれば，P 反応を含め必ず数個は見られるものである。Ⅰの「狼の顔」と「鬼の顔」，Ⅲの「人か鳥」と「子供」，Ⅷの「花」と「つつじ」などはほぼ同じに近いのであるが，両者の説明は僅かずつ違っていて，同一と見做す同意が得られなかった。

前述したように，Cl には 6 枚のカード（Ⅰ，Ⅱ，Ⅳ，Ⅵ，Ⅶ，Ⅹ）に形態質マイナスの反応が計 7 個ある。その内，Sp が不同意としたのは 3 個であった。Ⅱカードの DW の「顔」（事例 1 にも同様の反応があった。成人には稀有な反応なので，慎重に質疑を行ったが DW と判定された），Ⅳカードの濃淡だけで形態のほとんどない「レントゲン」，Ⅵの blot とマッチしない「洞窟」，同様なⅩの「骨盤」などのマイナスの反応を Sp は「解る，そう見える」と同意している。この他にも，Sp は Cl の強引な反

応，不明確な反応にも同意する傾向があった（反応2, 7, 8, 12, 23, 25）。Sp は Cl の判断にほとんど同意してしまう傾向を見せている。Cl の反応 29 の内 Sp が同意したのは 22 個，部分的同意は 2 個，不同意は 5 個であった。

Cl と同様に，Sp の反応も形態質は高くない。F-L=0.5 以下の反応が 53.3%（8/15）に及んでいる。それらの低い質の反応の内 5 個を Cl は同意している。テスト施行中，Cl は Sp が説明している最中，Sp の言葉の端を取って，いかにも了解したように話をうばってしまうことが再三あった。そのようにして，Sp の示す反応をいかにも了解した様子を示したにもかかわらず，実は全体では約半数にしか同意していない。Sp の反応 15 個の内 Cl が同意したのは 8 個，部分的同意は 4 個，不同意は 3 個であった。

以上の特徴を再度記すと，①この二人は同一の反応を示さなかった，②Sp は Cl の判断にほとんど同意してしまう傾向があり，客観性の乏しい判断に対しても批判をすることは少なかった，③Cl は Sp に同調し，理解を示す発言をしながらも全面的に同意するわけではなかった，④二人に共通する特徴は，客観性の薄い判断をお互いが認め合っているということであろう。

考　察

以上，夫婦同席ロ・テストについて，その発想・施行法・事例を示した。臨床家が，援助のために夫婦や親子それぞれのパーソナリティを把握したいと思うことは多いのではなかろうか。そのような場合通常は，二人別々に目的に合った検査を施行し，その結果を並べてコミュニケーションのあり方を推測する位しか手はなかった。面接などの場を除けば，二人が実際にどのようなやり取りをするのかを直接アセスメントするには，相当な工夫が必要であったと思うし，標準化された技法はないのではなかろうか。

この同席ロ・テストは二人のやり取りが観察可能で，かつ個々の反応も得られるということに加えて，お互いに認知しあったものを相手に説明することを通して，自分の判断を理解してもらうためにどのような方略を用いているかも伺い知れる利点を持っている。日常の二人の関係や会話が浮き彫りになるようだというのは大袈裟であろうか。

もちろんそのような可能性がある技法であったとしても，いくつか検討しておかねばならないことがある。一つは，個人法で施行した時の反応と二人の場合の反応とではどのような違いがあり，それがその人の特徴の理解にどのような利点や欠点をもたらすかを把握しなければならない。次に，事例でも見られたが，検査への動機付けを配偶者や親にどう行うべきかという倫理上と施行上の問題があり，この解決が望まれる。家庭裁判所のマリッジカウンセリングや夫婦関係調整事件などでは，夫婦は二人とも当事者であるので検査への導入や動機付けにそれほど困難はないかもしれない。今までにもこの方法を用いることで，夫婦がお互いの物の見方の違いに気付き，夫婦の調停が成功したという事例を知らせてくれた調査官がいた。臨床的にも役立った事例である。しかし，精神障害者の場合，病者に付き添う配偶者や親は自分が検査を求められることに，容易には納得できないのではないかと思われる。それがいかに病者の治療に役立つとしても，親や配偶者たちが，自分が病者に与えている影響を疑われているのではと思ったとしても仕方がない。このような疑念を与える倫理的問題があるので，十分に目的と結果の feedback そしてその結果からの援助実践を被検者たちに伝える必要がある。岸本（2004）はバウムテストを「検査というよりは治療関係を深めるための一つの「窓」として捉え，コミュニケーションの助けと位置づけている」という。テストとしての側面よりもコミュニケーションとしての側面をより重視しているので，描けない自由を保障して，「気が向いたら描いてもらえますかということが多い」とも述べている。ホスピスケアに樹木画を導入した水口（2002）も，描いてもらうにあたって大切なことは「痛みなどの苦しみが取れて，私との信頼関係が保たれる時期まで心理テストの実施は待ちました。……またこのテストはこちらからのあなたの治療に役立てますと述べ，決して強制しませんと付け加えました」と，協力者が自発的にテストに取り組むまで待つなどの配慮の必要性を説いている。

最近は相談室で個人のカウンセリングを行うことが専らで，そこには親や配偶者が訪れることがないので，同席を勧める機会が殆どない。この技法を完成させるには，健康な成人のカップルでどのような交流が見られるのかなど，基礎的な資料を集める必要がある。

文　献

Exner, J. E. Jr. 1986　The Rorschach: A Comprehensive System Vol. 1: Basic Foundation　現代ロールシャッハ・テスト体系（上・下）高橋雅春・高橋依子・田中富士夫監訳　金剛出版　1991

岸本寛史　2004　緩和のこころ　誠信書房

水口公信　2002　最後の樹木画　三輪書店

Myers D. G., 1986 Psychology chapter 15 personality p415-417 Worth New York

八尋華那雄・阪本良男　1975　心理テストから見た精神障害者の家族　臨床精神医学第 4 巻 12 号

八尋華那雄・阪本良男・川口礼子　1977　精神病者とその配偶者　臨床精神医学第 6 巻第 4 号

八尋華那雄・上島国利　1979　うつ病者の夫婦同席ロールシャッハ　ロールシャッハ研究 XXI

八尋華那雄，明翫光宜　ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較（1）施行法と反応領域・発達水準などの記号化について　中京大学心理学部・心理学研究科紀要　第 4 巻 1 号　2005

八尋華那雄，明翫光宜　ロールシャッハ・スコアリングシステム片口法と Exner 法の比較（2）反応決定因・形態水準評定・反応内容・平凡反応について　中京大学心理学部・心理学研究科紀要　第 4 巻 1 号　2005